【福島大学むらの大学アーカイブ22】【川内Chapter9】

17 年目を迎えるBON DANCE

『BON DANCE』と川内のミライ

秋元活廣さん　秋元恵美さん

【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー　10月12日・秋元さんご自宅

第2回インタビュー　10月30日・秋元さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類　木戸雫

共生システム理工学類　岡本侑祐

食農学類　米長愛尊

担当教員　千葉偉才也

プロフィール
秋元活廣さん
川内村生まれ。高校卒業後、電力関連企業に就職。BON DANCE 実行委員長として川内村の地域づくりに取組んでいる。

秋元恵美さん
浪江町生まれ。仙台の短期大学卒業後、地元の歯科医院に就職。震災後に活廣さんとご結婚され、現在は川内村内の花屋で働いている。

１．震災前の生活

秋元活廣さんは高校まで川内村で過ごし、その後は全国を放浪していた。
秋元秋元活廣：富岡高校川内分校というのがあって。18歳までは外界を知らずに、井の中で育ちました。もうここ（自宅）から学校しか往復してないです。どこにも行かなかったです。
その後は、アルバイトをしながらぶらぶらしてました。日本全国。
うちの親父が、私が25か26ぐらいの時に60で定年になるので、じゃあそれを機に戻ってこようということで、26のときに戻ってきました。
それで仕事を探して、その原発の中の、そういう会社があるっていうんで、そこに行って。その会社自体は、本社が横浜で、いろんな事業部があって。プラント事業部というのが、その原発担当で、あとはいろんな部署があって。私は最初、プラント事業という、原発ではなくて別のとこの事業所で。それが出張が多くて、それで出張をずっとしてたって感じです。震災になったときは、私は38、9、十何年前だからそんなもんです。

その当時の川内村は、どのような地域でしたか。
秋元活廣：正直、今とあまり変わらないです。人口は震災で減ったとは言いますけど、もともとそんな多いわけではなくて。震災前も3000人を切るぐらい。2800とか2900。3000行かないぐらいをずっと維持してるぐらいの、そんな感じの村でした。元々そんなに何もない。川内村も、震災後、原発事故があったときに、一応20キロ内とか30キロ内とか、そういう区切りができて、川内村も20キロ内に少し入っているんです。毛戸地区とかあの辺の、下川内の一部とかが入ってるんで、その辺はだいぶ変わってはいますけど、この辺はそんなに。平和でした。

２．震災以降の生活

2011年3月11日は、どこで何をされていましたか。

秋元活廣：私はそれまで埼玉の理化学研究所で仕事していて、2月ぐらいだっけかな、ちょうど出張が終わって帰ってきて、原発の構内でちょっと仕事をしてたら、そこで地震に遭ったんです。そのときは現場に出ていたので、外だったので、現場で仕事をして、地震があって、とりあえず事務所に戻ってみんなの点呼を確認して、じゃあそれから帰ろうねといったら、もう駐車場が大渋滞というか、車も大渋滞だったので、車の中でテレビを見てたんです。どうせ動けないからって。そしたら、「宮城に津波が来てます。大変だ」なんていって、「宮城は大変だな」って、ただテレビ見てたんですけど。まさかそんな、そこの原発も大変なことになってるって、そのとき気付かなかったんです。

原子力発電所に行ったことがあれば分かるんですけど、炉心というか、それが並んでるとこって海のそばで、そこから高台があって、普通の会社さんの事務所とか、おきばとかがあるんですけど、私たちはその、おきばにいたんです。事務所もそこにあるので、まさかこっちの低いところが津波になってるって気付かずに。それで、道路が駄目だとか、あっちが駄目だっていってみんなが、出てった人たちがまた戻ってきて。「あっちが通れないからこっちへ行く」とか言ってるんです。

ある程度の人がわっといなくなって、駐車場が空いてきたんで、「じゃあ帰ろうかな」って川内に帰ったら、川内は電気がついてるんです。家に着いたら、親父とおふくろが、こたつにあたってテレビを見てるんです。そして「大丈夫だったか」と言ったら「コップ二つ割れちゃった」って。だから川内村は、そんなに被害がなかったんです。揺れはしたんでしょうけど、家がつぶれるほどの揺れじゃなかったんです。瓦が落ちたとか、窓が割れたとか、そういうのはあったみたいですけど。だから「そうなんだ」って。

あれは金曜日だったんです、地震が。会社の人が辞めるといって、金曜日に送別会しようと言っていたんです。それで木曜日に、俺は燃料を満タンにしていたんです。いつも週末に燃料を入れるんですけど、週末のその金曜日に送別会があるから、じゃあ燃料を満タンにしとこうといって、木曜日に燃料を満タンにしていたので、私はガソリンは大丈夫だったんですけど。だから。それだけですけどね。それで土曜日、奥さんになる恵美ちゃんちに、あいさつに行くっていうことだったんです。

秋元恵美：浪江町の歯科医院で仕事を。午後の診療が2時からだったので、午後の診療をしてました。治療中だったんですけど、もうだいぶ揺れがひどくて、道路も結構割れちゃってたので、ひび割れちゃって。院長の実家が本当に請戸のほうだったので、津波が来ていると

ニュスで流れてたので、みんなで帰ろうとなって、その場で解散して。患者さんにも帰ってもらって、私もおうちに帰りました。
私が仕事から帰って、おうちには、私は実家で暮らしてたので、私のおじいちゃんと母親と、私3姉妹で一番下なんですけど、2番目の姉が家に入ってたというか。結婚して、姉家族と両親とおじいちゃんと私とっていたんですけど。ちょっと家にいるのが怖かったんで、小学校の体育館に避難をして、その日の夜は体育館にいたんですけど、次の日の朝、もう避難してくださいって。浪江町は避難指示が出たので、津島のほうに逃げてくださいって言われたんですけど、家を出たのは、荷物をちょっとだけ持って、7時ぐらいに家を出たんですけど、津島まで行くのにもすごく時間がかかって。もう行ったときにはすごい、いるところがなかったんです。いるとこなくて、そのときおじちゃんが90歳近かったんですね。おじいちゃんがあれだったんで、都路村に親戚がいたので、親戚の家に行って。でも親戚といっても母方の親戚なので、じいちゃんは帰りたくていたんです。だから、そこから何時間かちょっとお邪魔させてもらってから、葛尾の体育館に避難して。
　そのときに3月12日時点で、原発が危ないから、もうちょっと避難しようといって、福島東高校に避難したのかな。東高校に3日ぐらいいたんですけど、そこから西郷村の那須甲子青少年自然の家に避難し2カ月くらいお世話になってました。

震災当時の川内村について教えてください。
秋元活廣：富岡の人たちが川内に避難してきたじゃないですか。俺は、月曜日の片付けが面倒くさいなと思ってたんですよ。津波で大変だということを、あまり気付かなかったので。「月曜日、事務所の片付け大変だな」なんて。本棚は全部崩れていたので、面倒くさいなと思ったら、しばらく休んでいいよって電話がかかってきたんで「ラッキ」と思って。仕事行かなくていいから。自宅待機というか、「仕事があったら連絡するから」っていう、会社からの連絡があったので、分かりましたといって。そのときに富岡からいっぱい人が来てたので、村もてんやわんやだったので、まず富岡の人たちに出す食べ物がないとか。だから、お米のある人は出してくださいとか、野菜を出してくださいとか。あとは、手伝える人は手伝ってくださいということで、俺、役場に自転車で行って、ボランティアの登録をして、ボランティア、一応、活動をして。
　その頃、川内の空いてる施設全部、全て、公民館から小学校、中学校、そのとき高校もあったんで。あと体育館から、いわなの郷、あとは個人の家も。みんないろいろなとこに入ってたんで、誰がどこに何が入ってるか分かんないんで、「とりあえず、じゃあ名簿を作成しようか」と。例えば川内の小学校のそこに記帳台を置いて、そこに名前と住所と書いてもらって、中学校の体育館はここ。あと、いわなの郷には、というのを全部集めて、ファイ

ルではないですけど、そういうのを作ってたりしたんです。

　そしたら、1日、2日したら、川内も、みんな逃げるぞってなったんで。それで、親父とおふくろは、とりあえず船引に親戚がいるんで、その親戚の家に行ってくれと。「俺は川内村と、富岡と一緒にビッグパレットに避難する」っていって、ビッグパレットに避難して。でも、そのときに仕事の電話が来たのは、長野県の諏訪湖。取水門といって、水をせき止める、あれの輸送作業があるんでっていうのが来たんで、長野県に仕事に行ったんです。4月の初めの頃だったかな。そしたら、長野県に、仮設住宅こっちという看板が出てるんですよ。「あれ？そんなに大震災で、長野にも仮設住宅建てたんだ」と思ったら、長野県も地震があったんですね。同じような日。そこで1週間ぐらい仕事をして、またビッグバレットに戻って。その頃は、おふくろと親父は、川内にちょこちょこ帰ってきたらしいです。もともと別に何でもなかったし、電気も通ってますし、その頃の放射能の汚染みたいなのも、そんなに気にしてなかったんで、親父とおふくろはちょこちょこ帰ってきながら、親戚の家を行ったり来たりしてたみたいです。

一方で恵美さんは避難生活が続いていたんでしょうか。

秋元恵美：そうです。でも7月に籍入れたので、6月ぐらいに、いわきに一緒に住むところを私が探して。もう空いてないんですよね、いわきもいっぱいで。最初2カ月、レオパレスに2人で住んでました。

秋元活廣：私、あまり連絡取らないほうなんで、電話したり。面倒くさいわけじゃないんだけど、なんか連絡を取らないな。震災になって、まあ大丈夫だろうっていう感じなんで。大丈夫でしょうっていう。だから、「大丈夫か」って聞かなかったよな。

秋元恵美：そうなんです。そんな感じするんじゃないですか。地震あって、「大丈夫？」って連絡しても、返信よこさないんですよ。信じられないでしょう（笑）。取らないんです。今でも。なので、生存確認ができなかったので。

秋元活廣：その頃は、電話もつながらないとかもあったわけ。基地局が、浜の基地局の電波がここまで届かなくなっちゃって。高田島に行くと中通りの電波を拾えたんで、高田島まで行くと電話がつながった。だから、富岡の人たちが来てるときに、車に「連絡取りたい人、車に乗って」って車に乗せて、高田島まで行って、それで電話してまた戻ってくるっていう。それをやってました。生きてんだろうなって思ってたけど。私の職場の後輩に川内の人と結婚した人がいたんで、「悪いんだけど、ちょっと様子を見てきてくれる？」ってお願いして、その子の旦那さんとも仲よかったんで、確認してきてもらったら、「元気でしたよ」って。

活廣さんは震災原発事故以降も原発での業務にあたられていたのでしょうか。
秋元活廣：そうですね、最初は、Jヴィレッジあるじゃないですか。Jヴィレッジから全面マスクとタイベックとガムテプでぐるぐる巻きにして、バスに乗って行くんです。そうすると、広野から先って真っ暗なのよ。野良ウシとか、野良ダチョウとかがいっぱいいたんです。何か混んでんな、車が全然動かないなとぱっと見ると、ダチョウが道路の真ん中で踊ってんの。
そう。イノシシとブタのイノブタみたいなのがいっぱいいましたし。ウシも、野良ウシがいっぱいいましたし。そんな中を車で、よけながら走ってました。
その前段階で、ビッグパレットにいるときに、あちこち行ってくれっていう話があったんですけど、そのときに、前も言ったように、俺は車が満タンだったんで、「いいよ」って行ってたんですけど。ガソリンなくなって、郡山も入れるとこだんだんなくなって、「ちょっと燃料ねえな」って。そうしたら会社の人が、「じゃあ今度、燃料持って行くから、待ってて」って。それ誰も来ないんですよ。それが4月の終わりぐらいだったかな。そして、「いま原発に行くんで、迎えにきたから」って迎えに来てもらって、それで行って。
　そうしたら、広野のJヴィレッジの中に給油所があったので、そこでガソリンを満タンにしてくれるんですよ。だからそこで満タンにしてもらって、それでまたビッグパレットに戻ったりとか。あとその中で、西郷に行きました。恵美ちゃんが避難してるとこ。
なんか、「お父さんお母さん、よろしくお願いします」って。行ったよな。
秋元恵美：うん。震災前に1回は来てるんですけど、「この日に籍入れます」みたいな感じで。

活廣さんと恵美さんは2011年7月8日に入籍、新生活をいわき市で送ることになる。川内村はまだ郡山市に避難をしている状況だった。
秋元活廣：夏ぐらいに、だんだんとみんな仮設住宅に引っ越したり、あと住むところが決まったりして、ビッグバレット自体には、お盆ごろの時期にはもう、ほぼいなかったかな。ビッグパレットの真横に仮設住宅がいっぱいできたんで、そこに富岡の人たちとか川内の人たちとか、結構入ってたんで。ビッグパレット自体にはもういなかったな。ビッグパレットもあちこちガラスが割れてて、あまり全部を使えなかったというか。だから、廊下から何からみんな寝てましたね。
秋元恵美：歯医者での仕事はもうできないから終わりにするっていって、退職という形でハローワークに行ったりとか。結婚したので、いずれ子ども欲しいなとは思ってたので、そんなに急いで職は探してなくて、普通に。いわきは普通の生活だったので、普通にしてました。

いわきでの生活はいつまで続いたんですか。
秋元恵美：レオパレスは2カ月ぐらいで、そのあとにアパートに引っ越して、2018年。長女が保育園に上がるタイミングで川内に来たので。
秋元活廣：6年前。7年前。そのくらいかな。母屋があって、こっちの離れがあって。最初、母屋をリフォームして、そっちができたら母屋に住んで、こっちの離れをという段取りでリフォームしてたんで。そうしたら思いのほかリフォムが長引いて、まだ引っ越しできない状態だったので、1年ぐらい、いわきから川内の保育園に子どもを送って。
秋元（恵）：おうちをリフォームするのに、こっちに住めなかったんだよね。1年ぐらい通ってたんですよ、いわきから川内の保育園に子どもを送って。
秋元活廣：でもまあ。その頃、私は仕事が夜だったりしたので、昼間送ってきたり。朝方送って、夕方は迎えに行ってもらったりとかって。そんな感じでした。だから、朝、子どもを保育園に送ったら、私はここで時間をつぶして、夜になったら仕事に行くって感じです。仕事が終わったらいわきに帰って、また子どもを送って、またっていう感じ。

その時期の保育園はどのような状況だったのでしょうか。
秋元活廣：普通にやってましたね。保育園は今の場所じゃなくて、いま妻が働いている花屋さんの、もうちょっと上にあった。
秋元恵美：いま大智学園が入ってるところに。

活廣さんのご両親は早い段階で川内に戻られたのでしょうか。
秋元活廣：そうですね。1カ月ぐらいかな、親戚でお世話になってたのは。それ前でも、ちょこちょこ来てたみたいですけど。川内村の場合は、下川内あるじゃないですか。信号のもうちょっと先、ゆふねの辺りに一応ゲートができて、そこから先はっていう話だったんです。ゲートからこっち側は自由だったんで、何でもなかったんです。だから、結構戻ってきてる人もいましたし。日中はここで何かやって、あと郡山に帰るみたいな人もいましたから。だから、意外に自由でした。親父もおふくろも、1カ月ぐらいして、ここに帰ってきて、普通に生活してました。

２．川内村での生活再建

活廣さんと恵美さんは、いわき市での新婚生活を経て活廣さんの出身の川内村に居を構えて生活をスタートされることを決意する。

お二人が川内に来られたタイミングって、子育ての部分もあるかと思います。当時子育てに関する不安とかはあまりなかったのでしょうか。
秋元活廣：奥さんはあったみたいです。恵美ちゃんはありました。でもまあ。
秋元恵美：原発からも比較的近いじゃないですか。近いというのもあったし、診療所はあったんですけど、病院とか買い物も、行くの遠かったし、不安でしたね。

そこはご夫婦の中で、もうちょっといわきにいようよとか、そういうような話はしたんでしょうか。
秋元活廣：いや。
秋元恵美：こんな感じで、「大丈夫なの？」って聞いても、「大丈夫でしょう」みたいな感じなので、話になんないわと思って。
秋元活廣：いや、もともとは、親父もおふくろもいるし、いずれは一緒に住むような感じ。いずれはというか。震災がなくても、私はここに住んで、奥さんが来るっていう話だったので、震災だからといって、じゃあ親と分かれて暮らそう、川内を離れようという気はもともとなかったので。もともと戻るとは、思ってはいたよね。
最初はこの土地を更地にして、二世帯住宅を建てようといって、あちこちハウスメカさんなんかをいろいろ回っていて。そんな中でも、たぶん奥さんは、「家を建てるということは、戻るということなんだな」ってことを、遠回しにも分かってたと思うんですけど。だからそんなに、「え、やだ」みたいな感じもなかったですし、「戻るぞ」みたいな感じの話もなかったんで。
秋元恵美：川内に戻ってきてる人も、まあまあいたのはいたので。「大丈夫なの？」みたいな感じではいましたけど、別に反対はなかったですね。
秋元活廣：秋元恵美ちゃんちは末っ子なんで、姉ちゃん2人いるんですけど、姉ちゃん2人のとこも子どもが結構いるんで。だから、秋元恵美ちゃんにいまさら子どもができたとしても、そんなに。そこまでの初孫ってわけでもないですし、別に。孫だなっていうぐらいのレベルなんで。（放射線の健康被害などに）気にしつつも、そんな反対はなかったです。もともとが、この辺の双葉郡地域って産業的なものがなくて、原発に行くか、それに携わる何かかぐらいしかなかったというわけなんで。
秋元恵美：姉2人の旦那さんも原発関係で働いてるので、原発に対してすごい嫌悪感っていうのは、そこまででもなかったので。

活廣さんにとっては久しぶりの川内村での生活、恵美さんにとっては初めての川内村での生

活はどうだったのでしょうか。
秋元活廣：そうですね。でもそれまでも、いわきに住んではいながら、俺はしょっちゅう川内に来ていたので、そんなに久々というか、間が空いたという感じもなかったので。
秋元恵美：でも、結構、付き合っているときからもちょこちょこは来てたので。
震災の前後での変化も無く、本当に。変わってないです。
秋元活廣：震災前って、保育園の園児というか、60人ぐらいいたんです。そこにアパートがあったりするんですけど、結構、子どもを持った世帯が、みんなアパートに住んでたり、奥さま方がその辺でしゃべったりというのは、震災前だとあちこちで見てたというか。子どもが多かったんで、それもあったんですけど、震災後はさすがにいなくなったなと。それは思いますけどね。

川内村に戻ってきた時期は保育園はどのくらいの園児が在籍していたか覚えていますでしょうか。
秋元活廣：20人ぐらいしかいなかったんじゃないですかね。
秋元恵美：25、6人。全部合わせてそのぐらいです。

現在の娘さんたちの学年はどのくらいの規模でしょうか。
秋元恵美：5年生で9人、4年生で12人。（保育園の頃から）ずっと一緒です。

今の規模感についてはどう思われますか。
秋元活廣：もともとそんなに驚くほど子どもたちがいたわけでもなく、大人たちもいたわけでないんで、そんなに変化がないですかね。もともと年寄りが多かったですからね。だから、そんなに気になるほど支障がないというか、困ってもいないので。

活廣さんの原発での業務は、廃炉に向けての取組みへと変化をしている。

実際に取組まれる業務は廃炉に関わるものに変化をしているのでしょうか。
秋元活廣：そうです。仕事の内容的には、重い物、大きい物を運ぶという仕事なんです。だからこの間、燃料デブリ取り出しだなんて、あれの装置自体をあそこまで運んだんです。あれ自体をハンドリングしたり、現場で操作するのはまた別な会社の人なんですけど、それを運ぶという仕事です。

もちろん稼働している原発と廃炉に向かう原発の違いはあれど、周辺の作業はそこまで変わ

らなかったりするのでしょうか。
秋元活廣：そこはほぼほぼ、一緒です。あまり変わらずというか。今のところ、震災直後はさすがにJヴィレッジから全面マスクして、ガムテプでぐるぐる巻きなんて話だったんですけど、それから1年2年たつうちに、Jヴィレッジからもうちょっと近く、今度は大熊の原発に入る手前でマスクをつけるとか。今となっては、爆発した1、4号機周辺だけマスク、それ以外は普通の格好というか。それにDS2という紙のマスク、あれだけで十分だよという。だから、あまりもう、ほぼほぼ変わらないというか。

川内村に住んでいると、震災前と後で生活や仕事でそこまで大きな変化を感じないのでしょうか。
秋元活廣：そうですね。感じないです。一番感じるのは、川内って盆野球ってやるんですけど、それの人がいないっていうのが、一番感じますかね。

３．川内村とBON DANCE

BON DANCEについてお聞きしてもよろしいでしょうか。
秋元活廣：BON・DANCEっていうのはどこにでもある盆踊りです。昔はね、私も小さい頃、川内村は行政区が８区まであるんで、その各区で盆踊りっていうのをやってたのね。農協の広場でやってたの。あそこにやぐらを組んで。あのころはね、出店がいっぱい出てたのよ。テキ屋さんというか、そういうのが普通の小さな村のお祭りでも必ず。諏訪神社があって、諏訪神社の春の例大祭、秋の例大祭というのにも出店がいっぱい出てた。県外の出てたかな。
俺、何歳ぐらいまでかな、大人になるぐらいまではそれぞれなんとかやってたみたい。それぞれ行政区でね。でも、だんだんとやっぱりやる人がいないとか、結構お金がかかるからお金がないとか、そういうのでやったりやらなかったり。だから、あっちの区はやったり、こっちの区はやらなかったりとか、そういうのがあったんで、「１か所で、みんなで盆踊りを一回やってみよう」っていってやったのが始まり。

みんなというのは１区から８区まで川内村全体ということでしょうか。
秋元活廣：そうそう。で、それを各区を通すと結構面倒くさいのよ。なんていうの、大人の事情があるんじゃない？だから、それって面倒くさいから、仲間内、友達をみんな集めて「手伝って」っていって、それでみんな集めて始まった。

今年で何年目になりますか。
秋元活廣：ええとね、「BON・DANCE」っていって始まったのが2007年なんで、今、17だね。まずは、2006年に、「一回試しでやってみよう」っていったのが2006年。それで、「ああ、いいんじゃない？」っていって、「来年もやろう」っていって、そんときにポスターを作ったの。で、印刷するとお金かかるんで、こういう板に版画掘ったの。それ、タダじゃん、印刷。ペンキ塗って紙ペタッとやって、あとこすれば何枚でもできるから、だから版画彫って、そこに絵を描いて、「いついつBON・DANCEやりますよ」っていう、その絵の中に「BON・DANCE」って書いたの。最初は「川内カーニバル」だか「フェスティバル」とかっていう、そういう名前で題名をつけて、2007年、「川内フェスティバル」だったかな、つけて、ちょうちんが並んでる絵のちょうちんのところに「BON　DANCE」ってたまたまローマ字表記で書いたの。そうしたらみんなが「来年もBON　DANCEやるの？」っていわれたので、来年から「BON DANCE」にしようっていって。
たまたま書いたポスターにそうなってたっていうだけで。だから、2006年に一度試しで集まってやって、「いいね」ってことで2007年から正式に始まったと、実際はそんな感じです。

それからは毎年やられているんでしょうか。
秋元活廣：そう。毎年やってます。一応ね。はい。震災の時に、川内村はビッグパレットに避難したの、全村避難だということで。その時に、３月に避難して、４、５、６、７、８、８月のときにビッグパレットの駐車場で、そのとき富岡町と、一応、川内村と、いろんな人もいたんだけど、おおまかにいうと富岡町と川内村の人たちがビッグパレットに避難して、そのころはビッグパレットの隣に仮設住宅ができて、そこに富岡と川内の人たちが住んで、そんな中で、「じゃあ、一回やろう」っていって、そこの敷地の中で盆踊りをやったと。太鼓たたいたり笛吹いたり、さすがに出店は出なかったけど、踊り踊って、そんな感じでした。で、コロナになったときも休まずやったの。一応、コロナ対策してね。例えば検温する、住所を書いてもらう、あとはマスクしてもらう、いろいろ対策して。結構怒られたけどね、大人たちに。
最初は2006年、2007年ぐらいのとき……2006年のとき、試しにやろうっていったときは本当に夜だけ。本当に盆踊りっていうのはもとは夜からだったのね。夕方ぐらいから、薄暗くなってからって感じかな。で、2007年にやるときに、「朝からやんねえか？」っていって、で、「さすがに朝はきついから、昼からやろうぜ」っていって、昼から、お昼の12時から５時だか６時までは、「みんなに歌を歌ってもらったりいろいろしようぜ」っていって、誰かアティスト呼ぶなんてお金ないんで、村のじいちゃんばあちゃんに声かけて、「カラオ

ケしてください」っていって歌うたってもらって、だから、午前中というか夕方まで、昼の部はカラオケ大会みたいのをやってもらって、午後の部でだんだん薄暗くなってきてから、なんていうんだ、要は屋台のちょうちんが明るく見えるようになってきてから、午前中というか、昼から夕方までを「BON MUSIC」っていう名前にして、午後からを「BON DANCE」にしようっていって、２部制にしてやってた。

踊るのは一般的な盆踊りなのでしょうか。

秋元活廣：そうそうそう。で、川内村って、おおまかにいうと下川内村と上川内村ってあって、下川内村っていうのは盆踊りというよりも「川内甚句」というのがあるんだな。歌謡って歌ってこと。短歌ってあるでしょう？　五七五七七、あれをリズムに合わせて歌うっていう。「恋に焦がれて鳴く蝉よりも　鳴かぬ蛍が身を焦す」みたいな、そんなやつをリズムをつけて歌う。それに太鼓、トントトン、トントトン、トントトンって太鼓が鳴るという。そういうのが下川内は「甚句」っていうのでそういうのをやっていた。

今もあるんじゃないかな、たぶんね。あるはず。しばらくBON　DANCEでも何度か「川内甚句」を歌ってもらったりやってもらったりした。で、上川内村は、その川内甚句じゃなくて、要は盆踊り、俗にいう。やぐらの周りで踊りながらやぐらの上で太鼓をたたくって。歌は別にない。違いがあるから。

そして、川内村は高田島ってあるでしょう？下川内、上川内、高田島ってあるんだけど、下川内は川内甚句というやつ、上川内は盆踊り、高田島は盆踊りなんだけど、たたき方がちょっと違うんじゃないかな。

同じ村の中でも全然違う。下と上ではね、下は、まず「甚句」っていう唄も入るし、太鼓のリズムもちょっと違う。上は、いわゆる盆踊りといわれるような踊り。高田島の場合は太鼓がメインなの。太鼓がメインというかね、太鼓が荒い……荒いっていう言い方はあれだな。激しいというか、結構、太鼓たたく人は大変だ。という感じ。

これからBON DANCEをどうしていきたいとお考えでしょうか。

秋元活廣：川内村ってもともと、俺が子どもの頃から3,000人前後でずっといくような、そんなに激しく人口も減らないし、増えないしって感じだったんだけど、震災があって原発事故があって一気に人が減って、今、2,000人ちょっとぐらいまで増えたんだけど、どうしても年寄りが多いしね、若い人も減ってるし、これからどんどん、たぶん加速度的に年寄りは死んでいくからね。若い人はなかなか出てこないんで、そうなっても続けていければいいなって感じかな。いちばんいいのは現状維持、現状維持っていう。現状維持するためには今

のままやってててもやっぱ続かないんでね。だから、今の感じをずっと続けるにはいろいろ試行錯誤しながら、いろいろあっち行ったりこっち行ったりしながら、なんとなく続いていけばいいかなと思う。今ね、十何年もやってると、あのころ、例えば子ども、小学生ぐらいの子が、今はもう手伝う主催者側になってるんだよね。そういうのがありがたいなと思うね。だから、それが、例えばあと10年もたてば、今、子どもだった人たちがまた手伝い側にまわってくれるかなと、そうするとずっと続いていけるかなと思うんだよね。だんだん人は少なくなっていくかもしれないけど。お祭りってやっぱ特別な感じがあるじゃない。
昼のお祭りじゃなく、やっぱり夜のお祭りっていうのは特別感があるでしょう？　例えば、子どもの小学生のときだったら、まず、父ちゃん母ちゃんからお小遣いをもらって好きなように使えるわけよ。例えば1,000円でも2,000円でもいいだけど、それを自由に使えるというね、そのぜいたく、そういうのをやっぱね、今の子どもにも味わわせたいなと。俺ら子どものときも、夜、外に出て遊ぶっていうのがやっぱ特別感があったの、子どもの頃はね。そういうのもね、やっぱり子どものときに味わったほうが大人になっていいかなと思うんで、だからやめずに続けてるんだけど。だからお盆でBON・DANCE。正直、別にね、子どもたちにタダで遊ばせてもいいのよ。でも、それじゃ面白くないんだよ、やっぱり。子どもってああいうとこでお金を使いたいのよ。例えば、どうでもいいようなくじ引きとかもしたいわけよ。
あれね、タダだったら面白くないのよ。その子どもはもらったお小遣いを使いたいわけ。そう。だから、射的なんて当たらないし、当たってもろくなものもらえないんだけど、やり終わったらまた後ろに並んでまたお金払ってやるっていう。子どもってやっぱりお金を使いたいんだよね。だから、ああいうのはやっぱりね、金額が低くても、やっぱり子どもはお金、だから、子どもにお金を払う……なんていうの？　払う、そういう経験をさせたいというかね、そういうのがやっぱり大事かなと思うんだよね。タダでやらせちゃうとね、やっぱり面白くない。

伝統を受け継ぐというよりは、次世代に向けた取組みでもあるということでしょうか。
秋元活廣：そうそう、そうそう。だから、別に伝統、無形文化財でも何でもないんでね。だから、子どもたちに、なんていうのかな、いろんな経験をさせたいというわけでもないんだけど。なかなかね、夜、俺ら子どもの頃も、盆踊りっていうと、昔はあちこちでやってたから、だから自転車で、例えばここは３区だから、４区に行ってみるとか２区に行ってみるとか、そういうのしてたの、夜ね。そういうのがやっぱり楽しかったんで、そういうのを今のこと子どもにもちょっと感じてもらえたらなと思ってね。

ガチャガチャとかと同じような感じなんでしょうか。
秋元活廣：そうなんですよ。あれね、子どもはね、あれ、タダだったらやらないんですよ、あんなもん。子どもたちは。やっぱり、あれはお金を使うという行為が体験なんだ。
中身なんかは、どうでもいいのよ、なんだろうな、メダルを例えば、「はい、このメダル、好きに使ってやって」っていってもあんまり面白くないんだよ、子どもはね。あれはやっぱりお金を使うっていうことが経験なんでしょうね。

BON DANCEの実行委員長はいつからやられているのでしょうか。
秋元活廣：最初からです。言いだしっぺだったんで。最初は、どこからもお金が出ないんで、実費で、自腹で、ずっとやってたんですよ。で、どのぐらいかな、何年かしたら、一応、村からお金が少し出るようになって、じゃあ、それで花火やろうとか。昔はね、川内に花火屋さんっていうのが、花火師ではないんだけど、花火を上げてくれる人がいたの。なんていうのかな、火薬の取り扱いというか、今はもう下川内のそのスタンドはやめちゃったんだけど、その人がいて、その人が花火を仕入れてやってくれてたの。だからね、そのころで「10万円分、上げて」なんていって。10万円なんていったってね、花火なんか１発か２発で終わりなんだけど、その人はいろんな花火を仕入れてくれて、10万円でいろいろ上げてくれてたんだよ。ありがたかったなと思って。その人がやめちゃったので、あとはちゃんとした花火屋さんにお願いするようになったんですけど。だから、そういう人のつながりも大事かなと思って。

BON DANCEが始まった時期は村民の機材なども村民の持ち寄りだった。
秋元活廣：最初はテントも、いちばん最初だから、各家にあるキャンプで使うようなテントとかを持ち寄ってやってたの。だんだんと次の年になったら、「村にこういうテントあるらしいよ」とかっていって商工会から借りてきたり、「テブルもあるよ」なんっていったら借りてきたりとかしてたんだけど、今になったら、今はだいぶ村から補助が出るんで、だから業者さんに全部、テントとか椅子とか頼んで出してもらってますけど。
その昔は、川内村、「24時間野球」っていうのもやってたの、朝から晩まで。朝８時にプレーボールしたら、次の日の８時までやるっていう。
秋元恵美：24時間テレビに……
秋元活廣：それは24時間テレビに合わせたこともあるし、全く関係なくやってたこともあるし。何年やってたろうな。５～６年やってたかな。それで、コロナになってなんとなくやらなくなっちゃった。
秋元恵美：いつの間にかなくなった。

秋元活廣：そう。さすがにきついのよ。川内村だけでずっとやってたこともあるし、ちょっと大変だっていって富岡町に応援願って、だから、昼の部というか、朝８時から暗くなるまでは富岡でやって。富岡のグラウンドってナイタがなかったのよ。川内村はナイタがあったんで、暗くなってから川内でやろうっていって。暗くなったら富岡の人たち来るのかなと思ったら、富岡の人は来ないのよ。10対10とかで。だから、代わりの選手が誰もいないっていう中で朝までやらなくちゃいけないという地獄のような野球だったな。

睡眠は取らないのでしょうか。

秋元活廣：取らないというか取れないというか。「あれ、次、バッタ誰だ？」なんていって、「まあ、いいや。行ってこい、行ってこい」なんて。だから、夜になると７人ぐらいしかいない、相手チム。「あれ？　足りなくね？」なんていって、「ちょっと２人貸して」なんていって、敵チムから２人借りてようやっと守るという、そんなのを何年かやってたね。そんなのもやっぱりBON DANCEに出てるっていうか、BON・DANCEで歌ってくれる人が、結局、24時間野球も一緒にやるっていう感じだな。やってるメンバーはいつも一緒という。

BON DANCEと盆野球は、今ではセットなのでしょうか。

秋元活廣：そうですね。昔はヘリポート、今は消防署前のヘリポートでやってるんだけど、その昔はグラウンドでやってたんで、盆野球部が終わって、終わったらそのままそこの会場を盆踊りの会場に準備して、それでその夜やったというか、夕方からやるという、そんなのもやってた。それがいちばん大変だったんだな。そのころヘリポート貸してくれないっていわれたの。あそこのあのヘリポートは、例えば病気やケガでヘリコプタが来なくちゃいけないんで使えませんって言われたの。だから、しょうがないからグラウンドでやろうっていって。だから、野球が終わったあとに一生懸命みんなで準備して、そんなんでやったこともあったな。で、ヘリポート借りれるっていう話になって、だから、別な場所を、一応、ヘリポートの代替え地としてつくっておけば、そのヘリポート使っていいよってことになったんで、ずっとヘリポートでやるようになって。

24時間野球っていうのを復活させようという動きはないんでしょうか。

秋元活廣：今年言ったのよ、「またやろうぜ」って。さすがにね、大変なんだよね、体力的に。もうちょっと替えの選手とかいればいいんだけど、だから、来年できればいいなと思うけどね。なかなかね、川内村は標高が高いでしょう？　400m以上あるんで、夏とはいえ、やっぱり、夜、寒いのよ。だから、夜はなかなか朝方まで寒くて大変なのよ。その辺で寝てたら風邪ひくぐらい。

復活させたら、川内村のＰＲにはなりそうですね。

秋元活廣：そう。だからね、コロナの前、24時間野球は誰でも参加ＯＫにしたのよ。じゃないと人がいないんで。だから、飛び込みでも何でもいいの。コロナのちょっと前も、例えば会社に行って、「今度、24時間野球やるんだ」なんていうと、「じゃあ、行ってみようかな」なんて、「あっ、来て来て」なんていって、１打席だけ出て帰るとか、そういう人もいたんだけど、コロナになって、コロナが明けてからも、「今年はやらないの？」なんて話が結構来たんだよね。だから、その辺の中学生がぽっと来て野球やって帰るとか、そういうことがあったんで、そういうのができればなという感じです。

BON DANCEはこれからも続けていきたいとお考えでしょうか。

秋元活廣：いければなと思いますね。さっきも言ったんですけど、いい意味での現状維持というか、そういうふうにいけばなと。今の感じを続けていけばなと。現状維持って、今のままやってるとどこかでだんだんポシャっていくんで、いろんなことをやりながら、試行錯誤しながら、BON・DANCE、名前がどう変わろうが何しようが、夏の思い出ではないけど、最後の子どもが１人になろうが２人になろうが、その子どもたちにも、さっき言ったように夜店でお金を使わせたいし、夜の遊びというか、特別感というか、そういうのを味わわせたいなと思うので、だから、BON DANCEという夏のお祭りが続いていけばなと思いますね。やっぱりね、夏……川内村の場合は特に冬が寒くてあんまり帰ってこないっていうのもあるし、夏はやっぱり帰省する人がそれなりにいるんで、少しでも、なんていうのかな、気にかけるんじゃないんだけど、「夏、川内村、BON・DANCEやってるから帰ろうか」っていうふうになってくれればなというふうには思いますね。今、子ども、あと10年もたてば大人になって、川内に残る人もいるし、どっかに行く人もいるだろうけど、残った人は主催者側になってくれればいいし、どっかに行った人は「あの時、BON・DANCEやってたな」っていって帰ってきてくれればいいし、そういう感じになっていけばなと。今もそんな感じだし、これからもそういう感じでやっていければなと。だんだんと人が少なくなればそんなことも言ってられないんでしょうけど。移住してくれる人が１人でも２でもいれば、そういう人たちが参加してくれればさらに輪が広がるかなと。

【担当学生感想】

私は、福島県出身ですが、地震の被害はあったものの、放射線や津波による被害は全くありませんでした。これからも、福島県で教員として働き、東日本大震災の時に生まれてさえいなかった子供たちに伝えたいと思い、むらの大学を受講しました。現地に足を運んで、お家

にもあがらせていただいて、そこで直接当時の話を聞くことができた経験はとても貴重で、この先もずっと私の中に残り続けます。震災当時の話だけでなく、雑談もできて楽しかったです。この出会いと暖かく受け入れてくださった秋元勝廣さん、秋元恵美さんには本当に感謝しています。ありがとうございました。また遊びに行きたいです。（木戸雫）

「BONDANCE」は単なるイベント以上の意味を持っている。震災後の混乱の中でも続けられたことは地域にとっての希望や心の支えであり、「現状維持ではなく、試行錯誤しながら続けていく」という姿勢は、他の地域やコミュニティへの励みでもある。　今後も川内の夏の風物詩として、子どもたちに楽しい思い出を残せるようなお祭りになっていくことを願っている。（米長愛尊）